

連載小説「女装強要妄想ノート」

7. 4月第3週 「パンツルック女装で外出させられる」

「うつ、うあ——でる、でちやううつ……！」

女子小学生のセーラー制服を着せられた佐々木真弓は、ベッドのへりに座って片手でスカートをめくり、そこから聳え立って亀頭まで露出している怒張を、もう片方の手でしごき上げていた。身長140センチ足らずの華奢な体格、可愛らしい顔立ちに、赤いボールのヘアゴムで二つ結びにした黒髪と、一見した限りでは女子小学生としか思われない容姿であったが、その股間から生えているモノは15センチ近くもある立派なもの。もはや合成映像のようにすら見えるアンバランスさだった。

彼の前に座り込んで、ちょうどイチモツを目の高さに覗き込んでいる亜弓が、
「真弓ちゃん、我慢してないでちゃんと出しなさい！ 男の子でしょ！」

こちらはTシャツにルームパンツのラフなスタイルで、兄を励ましていた。

日曜日の今日は朝から女子小学生制服で過ごしていたため、ムラムラはじゅうぶん溜まっている。すでに我慢は限界、あともうちょっと勢い良くこすれば射精するというところまで来ているのだが、その最後のひと押しがなかなか決心できない。

その理由は——

(ううつ、どうしてオレ、射精させられてるんだ——！)

部屋で学校の予習をしていたところへ、とつぜん亜弓が現れたのが10分前のこと。入ってくるなり、

「真弓ちゃん、今すぐオナニーして！」

中学生の妹が、高校生の兄に言うことではない。確かにここ一月ほどで、女装を見られたり、勃起を見られたり、オナニーを見られたり、果ては勃起に触られて射精してしまったりしていたが、だからと言って二つ返事で了承できる内容ではなかった。

しかし妹の強引さにけっきょくは押し切られ、真弓はいつも通りベッドに座り、スカートをめくりあげたのだった。朝から静かな興奮状態にあった男性器はたちまちのうちに伸びあがり、発射準備を完了したそこをしごき上げ始めたのだが——

「むう、なかなか射精しないわね」

妹は不満げに言う。

「はっ、はっ、あ、亜弓お姉ちゃんに見られてるのも、出しにくいん原因なんだけど……その、出すから、ちょっと外に出ていてもらうわけには——」

「却下。でも困っちゃうなあ。時間もあんまりないっていうのに」

「時間……って、なんのこと？」

「こっちの話。しようがない。この前みたいに、ちょっとお手伝いしてあげますか」

「えっ……ま、待って亜弓お姉ちゃん、それは、あ——！」

せっかちな妹が手を出して、真弓のペニスを両手でつかんだ。粘膜に触れられる痛みが走ったものの、すでに先走りで濡れそぼっているのでさほどでもない。むしろ他人に扱き上げられる快感に、射精の前で躊躇していた真弓は最後のひと押しを入れられて——

「あ、ああっ……！」

腰の奥に滾っていた劣情が一気に沸き立ち、真弓は情けない悲鳴をあげながら射精してしまっていた。

直前に亀頭にティッシュをかぶせた真弓が、薄紙の表面に浮き上がる白濁液の塊を呆れたように眺めやつて、

「真弓ちゃん、ほんとここだけは兄ちゃんなんだよねー。男らしさが全部ここに集まっちゃったんじゃないの？」

「うう、言わないで……」

快感と、羞恥と、罪悪感とに意識が押し流されそうになりながら、真弓は情けない声で答えるのだった。

「——で、どうしてあたし、いきなり、お、オナニーさせられたの……？」

手洗いと換気、着替えを済ませて、真弓は改めて妹に尋ねた。

いま着ているのは制服ではなく、どちらかと言えばカジュアルな女児服である。シンプルな白地の胸元に、女児服ブランドのロゴだけが入った女児長袖Tシャツに、目にも鮮やかなレモン・イエローのスキニーパンツ。

これもまた、妹のおさがりとしてもらった服のひとつであった。

(このパンツ、ぴったりしすぎて、恥ずかしい……！　スカートじゃないから下着が見られる心配はないけど、逆におちんちんのラインが浮いちやいそうで……！)

パンツもパンツで恥ずかしい。それを意識させられながらもじもじしていると、

「勃起しないようにするためよ。そのパンツ、勃起すると窮屈で苦しいだろうし、何より周りから見てバレバレでしょ？」

「う、うん。そうだけど……じゃあ、なんであたしに、このパンツを穿かせたの？」

「それはね——」

亜弓は勿体ぶるように一拍置いて、

「今日これから、真弓ちゃんには初めての外出に挑戦してもらうからよ」

「えっ……！？」

外出。その一言に、真弓の心臓が締め上げられるように高鳴り始めた。

「ちょ、ちょっと待ってよ！ 外出なんていきなり言われても、心の準備が——」

「あれ？ 最初に説明しなかったっけ？ このあと外出するから、間違っても勃起しないようにあらかじめオナニーしてねって」

「聞いてないよ！ 女装で、外に出るなんて……！」

「大丈夫大丈夫。シンプルなシャツとパンツだし、女児用だってバレないって。髪も前みたいに後ろで結んであげるから」

「いや、どう考えてもばれるでしょ、これ……！」

パンツは細身のスキニーで、明るいイエロー。トップスはシンプルなTシャツとはいえ、ポップな色合いのロゴと細身のラインは女の子らしいし、まして知っている人には女児服ブランドだとばれてしまう。

けれど妹は兄の抗議を鼻で笑って、

「いいじyan。あのノートにだってあったんだから、本当はお外にも出たい——ううん、連れ出されたいんでしょ？」

「うつ……！」

痛いところを突かれて、真弓は言葉に詰まる。

そもそも彼が女装している——いや、母親や妹の命令で「女装させられている」理由。

彼がオナニーのオカズとして、「こんな風に女装させられたい」という妄想を書き連ねた一冊のノートを、母親に見つかったためであり——そしてその「女装妄想ノート」の中には、今のシチュエーションに近似した妄想も書かれていた。

「パンツルックなら大丈夫だからと、女装で外に連れ出される」

「妹の友達のふりをして、女装外出させられる」

そう。女装で外に連れ出されるシチュエーションも、ちゃんと書かれていたのだった。

「本当はメイド服を着せた時や、小学校の制服をあげた時にも連れ出したかったんだけど、ママが止めたからあきらめたのよ。そう言うのはもっとゆっくりステップを踏もうねって。これでもちゃんと、真弓ちゃんに気を遣ってあげてるんだから」

「う……」

たしかに初めての女装外出が、ひらひらのコスプレメイド服や、女子小学生の制服というのは恥ずかしすぎる。

しかしパンツルックとはいえ、実際に女装させられて外に出ると物怖じしてしまう。勃起こそしていないものの、陰嚢がすくみ上って痛みを発していた。

「お姉ちゃんもついて行ってあげるから安心してちょうだい。というわけであたしの方も支度をしてくるから、真弓ちゃんは先に下に降りて、覚悟を決めておくようにね」

「ううつ、はーい……」

もとはと言えば自分で蒔いた種である。育つとは思っていなかつたからこそ好き放題にまいた種が、思わぬほど繁殖して大惨事になってしまった気分だ。ほとんどミントである。

おとなしく玄関に降りてしばらく待っていると、中学のセーラー服に着替えた亜弓が下りてきて、

「お待たせ。それじゃ、外に出る心の準備はできた？」

「う……ま、まだちょっと……っていうか、どこまでいくの？」

「そんなに緊張しなくていいのに。角の美容室まで行くだけなんだから、見られる心配もほとんどないんだし」

「角の——って、すぐそこの？」

佐々木家から100メートルほどのところにある、個人経営の美容室。家族でよくお世話になっているお店だ。確かにあそこならば、よほど間が悪くない限りご近所さんに見られることはないだろうが、

「うん。予約もしてあるから、他のお客さんに見られる心配もないわよ」

「それで時間がどうこう言ってたのか……でも、美容師さんに見られたら……」

「家族ぐるみのお付き合いなんだから、言いふらしたりしないって」

「で、でも新しいお客様が来たら——」

次々に「でも」を口にする「妹」に、亜弓はついに業を煮やして、

「もう、真弓ちゃんったら心配性なんだから。案ずるより産むがやすし、虎穴に入らずんば虎子を得ずっていうでしょ？」

「危険なのかそうじゃないのか、どっちなんだよお！」

騒ぎを聞きつけた母親もリビングから顔を出して、

「あら、今日はついにお出かけなのね。うんうん、パンツルックなら、真弓ちゃんも恥ずかしくないでしょ？」

「い、いや、恥ずかしいから！　どう見ても女の子の服だし……！」

なおも言い募る真弓に、母親は真面目な顔になって、

「いい？　真弓。人生って言うのはね、何事も経験と挑戦なの。どんなに大変で面倒に見えても、一つ一つこなしてゆくことで、あなたの肥やしになっていって、見える世界が広がっていくのよ」

「母さん……」

真弓は母親をじっと見つめ返して、
「それ、いま関係ある？」
「ええ。この経験を生かして、次はスカートで外出したり、公園で遊んだり——ほら、世界が広がるでしょ？」
「いってることは判るけど絶対何か違う気がする……！」
思わず頭を抱える真弓に、早くも靴を履き終えていた亜弓があきれたように、
「ほら、小難しいこと言ってないで、出かけるわよ」
「う、うん……」
こうなっては、もはや覚悟を決めるよりほかにない。真弓も用意されたスニーカー——妹のおさがりの、水色の女児用スニーカーを履いて、
「じゃ、じゃあ——行ってきます」
妹が玄関のドアを開け、続けて真弓も外に出る。
(玄関までなら、女子制服を着せられた時にも出たことがあるけど)
(でも、あの時とは違って、今日は家の外へ——ほんの目と鼻の先と言っても、家の敷地を出て、外を歩かなくちゃいけないんだ……！)
ドキドキしながらポーチに出ると、視界が一気に開ける。陽光が降り注ぎ、微風が肌を撫でて、ヘアゴムで留めたおさげを揺らして——
「わ、わあっ！？」
ツインテールのままだったことによく気付いた真弓は、慌ててヘアゴムを外して髪をほどき、ポケットにしまう。
「ど、どうしよう……あ、亜弓、シンプルなヘアゴム、持っていない？」
「あたしが持ってるわけないでしょ。どうせ美容室でほどいてもらうんだし、このままいけばいいじゃない」
「で、でも、下ろしたままじゃ、女の子だって思われちゃうよ……！」
「今さら何を言ってるのよ。男子制服を着てたって、女の子と間違われるくせに。今はそんな格好なんだから、完全に女の子のふりをした方がバレないんじゃない」
「うつ……でも、ご近所さんに見られたらまずいし……」
「さ、とにかく予約の時間までもうすぐだし、出かけるわよ、真弓ちゃん」
「う、うん」
ポーチから続くステップを踏んで門扉へ、そしてとうとう家の敷地を出て外の道路に降り立った真弓は、まるで始めて外の景色を見る子供のような表情で、見慣れたはずの住宅街を見回した。
「ご近所さんは……いないみたいね。ちえ、残念」
「残念とか言わないでよ……」

ぼやきつつ、亜弓とともに美容室へと歩き出した真弓だったが、やはり落ち着かない。まるで小動物のように周囲をうかがい、物陰や曲がり角を見ると、誰か出てくるのではないかと身構えてしまう。

「くすくすっ、真弓ちゃん、怯えすぎ。堂々としてたほうが、逆にバレないもんだよ？」

「そ、そうはいいうけど、やっぱり恥ずかしいんだって……！」

ぴったりしたパンツは、歩くだけでも股間のものが圧迫されて、思わず変な声を出しそうになってしまふのだ。

(あらかじめ射精したから勃起することはないけど、敏感になっちゃってる……！)

(うう、早くお店の中に入っちゃいたい……！)

ほんの100メートルほどの距離を、真弓はあまりにも遠く感じていた。

*

「いらっしゃいませー。あら、亜弓ちゃんと……真弓くん？」

創業25年。外観も内装も年季の入った美容室で二人を出迎えたのは、まだ若い——20代後半の女性美容師だった。

化粧気はないものの影りの深い美人で、栗色の髪をヘアクリップでまとめ、すっきりとした開襟シャツとデニムパンツ、「美容室 サキ」の店名が入った黒のエプロンがよく似合っていた。

「咲さん、こんにちは」

「こ、こんにちは。カットをお願いしに来たんですけど」

「あら、あら」

咲は驚いたように目を丸くした後、にっこりと笑い——爆弾を、投下した。

「真弓ちゃん、やっと女の子に変身する気になったのね」

「なっ……！？ 女の子……！？ しかも『やっと』って……！？」

声を裏返す真弓に、咲は苦笑して、

「だってそれ、どう見ても女児服じゃない。『Angel Baby』っていえば、駅ビルにも入ってる有名なブランドでしょ？ パンツもスニーカーも女児用だし」

「ううつ……で、でも、『やっと』ってどういう意味ですか……！？」

「だって真弓くん、あたしがふざけてどんどん長くしていっても、嫌がるどころかまんざらでもなさそうな感じだったんだもの。ツインテールにしましょうかとか、リボンつけましょくかとか言って揶揄っても、そんなに怒らなかつたし」

「う……」

「だから私、わかってたんだ。ああ、真弓くん本当は、女の子っぽくなりたがってるんだー

一って」

「う、ううっ……！」

「それに——商売柄わかっちゃうんだけど、ツインテールを結んでた後、まだ残ってるよ？
なに？ うちではもう、ツインテールにしてるの？」

「あ、あ……！」

一から十まで種明かしされて、まるで出先でズボンの前チャックが開いているのを指摘
されたような恥ずかしさに、真弓は真っ赤になる。

咲はからからと笑って、

「ま、もうバレてるんだから遠慮しないで、女の子っぽい髪形を注文してちょうだい。今日
はどうする？ サイドテール、ツインテール、ハーフアップポニーテールに編み込み。お嬢
様風のぱつんロングでもいいし、真弓くんくらい長かったら、何でもできるよ？ なんだと
ったら金髪に染めて縦ロールの悪役令嬢風とか、小悪魔風もりもり東京タワーとか」

「し、しませんから！ そんな髪型にしたら、学校にも行けないし……っていうか、東京タ
ワー……！？」

「咲さん、ちょっと」

亜弓が耳打ちすると、咲はふんふんとうなずいていたが、

「たしかに、最初はそれくらいがいいかもね。うん、任せてちょうだい。じゃあ真弓くんは
こっちに来て、亜弓ちゃんは待っててちょうだいね」

「はーい！」

「え、え……？ 結局オレ、どんな髪形にされるんですか……！？」

「それは後のお楽しみよ。学校に行けないような髪型にはしないから、安心して」

果てしなく不安だったが、それでも美容室では美容師の言葉は絶対である。真弓は素直に
チェアに座り、まずはいつものように洗髪の後でカットしてもらう。

(はあ、だんだん長くされていってるなとは思ってたけど、まさか女装願望があることまで
バレてたなんて……)

今回も短くはせず、毛先をそろえる程度にとどめる。気づけば背中まで届く、女子でさえ
なかなかいないストレートだ。前髪もぱつん気味に切りそろえられて、いつもにまして女
の子っぽくされている。

しかし、今回は後ろで雑にくくっておしまいではなく——

「じゃあ、髪形をセットしてあげるから、真弓くんはちょっと目を閉じててちょうだいね」

「は、はい」

ドキドキしながら、真弓は言われたとおり眼を閉じた。

すぐに咲の手が、まずは髪全体を左右に分け始める。ヘアクリップで所々固定しつつ、コ
ームできれいに分け目を作つてから、さらにそれを三つの束に分けて、ときおり引っ張りな

がら絡ませてゆき——

(こ、これって……！)

いったいどんな風にされているのか、見なくてもわかる。しかし真弓は目を閉じたまま、じっと完成の時を待ち続けた。

一番下まで編みあがったところで、

「兄ちゃん、ポケットに入れたもの、出すね」

「う、うん……」

妹の手がパンツのポケットの中を探り、ついさっき真弓がしまったものを取り出して咲に渡した。

「はい、咲さん」

「ありがとう。あははっ、家ではこんな可愛いのを使ってるんだ」

咲は受け取ったもの——赤いボールのついたヘアゴムで、絡ませた髪の先を留めると、毛先を軽く整える。反対側も同様にしてから、体にかかっていたシートを取り除けられて、最後に結んだ二つを前側に垂らせば——

「はい、完成。もう目を開けていいわよ、真弓くん」

ドキドキしながら、真弓は目を開く。

正面の鏡に映っていたのは——長い黒髪を左右で三つ編みにされ、赤いボール付きのヘアゴムで留めた、自分の姿であった。着ているのがシンプルなシャツとパンツとはいえ、どこからどう見ても女の子としか思えない。

「あ、あ……！」

「どう？ なかなか似合ってと思うんだけど」

「は、はい。すごく、可愛くて、女の子っぽくて——」

嬉しい。気に入った。

しかし続く言葉は、恥ずかしさのあまり口には出せない。

それでもじゅうぶん伝わったようで、咲は会心の笑みを浮かべた。

「あははっ、よかったです。ちなみに三つ編みも跡が残りやすいから、学校に行く直前にやっちゃだめだよ？ 一発でバレるからね？ まあ、それでバレて女装させられるシチュエーションも、真弓くんにとってはいいのかもしれないけど。女子制服を着せられちゃったり——」「うつ……き、気を付けます……」

想像すると、パンツの中のものが大きくなってしまいそうで、真弓は慌てて言葉を遮る。

「はあー、久しぶりに若い子の長い髪がいじれて楽しかったー。これからも、よかつたらうちに来て髪を弄させてちょうだい。あたしの練習にもなるし、普通のヘアセットだけならお代はいらないから」

「え……いいんですか？」

「うん。いろいろ試したい髪型もあるし——なにより、真弓くんのいろいろな髪形、見てみたいな。はあ、次はどんな髪形にしようかしら……」

「お、お手柔らかに……」

咲の勢いにややたじろぎつつも、女の子らしい髪形にされる歓びに目覚める真弓なのだ
った。

*

「咲さん、ありがとうございました」

「はーい。またのご来店、お待ちします」

咲に見送られ、真弓は妹とともに美容室を出——

「あら、亜弓ちゃん」

「！？」

ちょうど目の前に現れた主婦3人組とのエンカウントに、真弓は心臓が止まりそうにな
った。

(ま、まずいっ……！)

現れたのは、よりもよってご近所で最も噂好きなグループである。もしも彼女たちに女
装バレするようなことになれば、この土日のうちには話がご近所中に広まり、上は耳の遠く
なったお爺さんから、下は黒猫一匹に至るまで、「佐々木真弓くんが女兒服を着て美容室に
行き、三つ編みにしてもらった」と知れ渡ってしまうことだろう。おそらくは多分に尾ひれ
がついて。

(そんなことになったら、おしまいだ——何とかして、この場を切り抜けないと……！)

絶望の表情を浮かべつつも、打開策を考える真弓。

幸い亜弓の方が前に立っていたため、彼女が先に挨拶する。

「こんにちは、芹沢さん。新見さんと、平山さんも」

「ええ、こんにちは。そのセーラー服、志路学園のよね。ふふっ、進学おめでとう」

3人組のリーダー格——育ちの良いお嬢様がそのまま齢を重ねた、という感じの芹沢夫
人が言えば、亜弓もそつなく返す。

「ありがとうございます、芹沢さん」

「今日は美容室帰り？ それとも——後ろの子の、付き添いかしら？ 見ない顔だけど、亜
弓ちゃんのお友達？」

「ええと……」

さしもの亜弓も、どう紹介したものかと言いよどむ。

芹沢夫人と他二人の視線に、真弓は緊張に身をすぐませるが——

「は、はい。あたし、亜弓ちゃんの従妹の、マユっていいます」

勇気を振り絞り、精いっぱい女の子らしい口調で言って、丁寧にお辞儀する。

「今日は亜弓ちゃんのおうちに遊びに来たんですけど、髪が伸びてるって話したら、ついでに切ってもらうことになって……」

「まあ、そうなの。道理で、よく似てると思ったわ」

「ほんと、よく似てるわねえ。亜弓ちゃんより、真弓くんに」

新見夫人の言葉に、真弓は表情を変えそうになるのを必死でこらえながら、

「はい。お兄ちゃんにそっくりだって、よく言われます」

幸いそれ以上怪しまれた様子はなく、

「ふふっ、三つ編み、とっても良く似合ってるわよ」

「あ、ありがとうございます！」

お礼を言うと、芹沢夫人は特に怪しんだ様子もなく微笑んだ。

亜弓もほっとした様子で、

「それじゃああたしたち、これで失礼させてもらいますね」

「ええ。お母さんと真弓くんにも、よろしく伝えておいてね」

「はい、伝えておきます」

「し、失礼します」

ようやく3婦人たちと別れ、ある程度遠ざかったところで、真弓はほっと息をつく。

「ば、バレなくてよかったです……！」

「くすくすっ、なかなかいい機転だったわよ、マユちゃん。ぶりっ子声もすっかり板についたじゃない」

「も、もう、言わないでよ……！」

恥ずかしさに後頭部を搔こうとする真弓。

しかしその手が先に触れたのは、豊かな黒髪の三つ編みで、

「そつか、オレ、咲さんに三つ編みにしてもらったんだっけ……」

「よかったです、マユちゃん。芹沢さんにも可愛いって言ってもらえて」

「う、うん……」

冷静に思い返すと、今さらながらに顔が熱くなってくる。

パンツルックとはいえ、女装での外出。美容室で女装バレから三つ編み。そしてご近所さん見られて、女の子の振り——

(め、目まぐるしかった……！)

ほんの100メートルほどの外出にもかかわらず、思いがけない出来事が次々に起こる。

今まで通り男の格好で切ってもらうだけでは絶対になかった、新鮮な体験だ。

「何事も経験と、挑戦、かあ……」

出かける前に母親の言っていたことを思い出し、少し感慨に耽る真弓だったが——

(で、でも、やっぱり女の子の格好をするのは、恥ずかしい……！)

慌てて首を振るとおさげが揺れて、真弓はいよいよ赤くなりながら、自宅への道を急ぐのだった。

(続く)